

論文

「レヌカの学び」を用いた留学生と 日本人学生の協同学習の試み ——異文化間教育プログラムの提案と実践報告——

山崎 瑞紀 田 浩 程 一塵

本稿では、相互理解を促すことを目的として行った留学生と日本人学生の協同学習、さらに、そこで作成された教材を用いて行った2つの実践について報告する。「レヌカの学び」の留学生バージョンを新たな教材として作成するためには、留学生自身が話す内容に耳を傾ける必要がある。カードや解説をわかりやすく魅力的なものに作成するためには、日本語を母語とする（日本人）学生の存在が不可欠である。協同学習に必要とされる「相互依存」の関係が成立しており、集団間の相互理解や偏見低減を促す学習として注目される。作成した教材を用いて行った実践においても、大学生、社会人ともに、留学生個人の目を通して世界を見る体験をし、多くの気づきを得ることが示唆された。

キーワード：多文化教育、協同学習、留学生、異文化交流、教育用ゲーム

1. はじめに

日本における在留外国人数は約296万人（2022年6月現在）^[1]であり、すでに日本には異文化を背景にもつ多くの人々が生活している。こうした中で、外国人と日本人の友好的な関係の構築・維持は、日本社会の重要な課題である。大学や日本語教育機関においても約24万人（2021年5月現在）の留学生が日本で学んでいる^[2]。出身別内訳は中国47%、ベトナム20%、ネパール8%、韓国6%であり、90%以上がアジア出身者である^[2]。

異なる集団間の友好関係の構築については、接触の量だけでは不十分であり、接触の質が重要とされる^[3, 4]。オルポートによる接触仮説^[3]を初めとする先行研究の検討により、接触が効果をもつための条件として、①制度的支持、②成員間に意味のある関係性を築くこと（密度の濃さ）、③対等な地位、④協同、が特に重要であることが指摘されている^[4]。ここで、協同とは、集団の各成員にとって望ましい共通の目標（上位目標）を達成するために、成員が相互に依存している（どちらが欠けても達成できない）状態をいう。集団間接触研究のメタ分析^[5]によれば、集団間の接触は偏見の低減をもたらすこと、集団間接触が上記の条件下でなされる場合に特に偏見が低減されること、これらの条件は個々に独立した要因としてというよりは、相互に関連し合って作用す

るものとして考える方が適切であることが示されている。

大学において留学生と日本人学生が共に学ぶ状況ではこれらの条件を満たすことが比較的容易であり、協同的な活動は集団間の相互理解や偏見の低減、好意的態度を促す可能性がある^[6, 7, 8]。本稿では、相互理解を促すことを目的として2022年度に本学で行った留学生と日本人学生の協同学習、さらに、そこで作成された教材を用いて行った実践について報告する。

2. 「レヌカの学び」について

「レヌカの学び」は、多文化共生や人権について考えるために開発された教育用カードゲームであり、開発教育協会から発行されている^[9]。日本の教育を学ぶために来日したレヌカさんという実在のネパール人女性のネパールにいるときと日本にいるときの行動や考え方の変化をもとに作成されている。参加者は、18枚のカードの内容が「ネパールにいるときのレヌカのこと」なのか、「日本にいるときのレヌカのこと」なのかという視点で、グループで意見を出し合い、話し合って分類する。その後、答え合わせをし、解説を聞く。教材では、これらを通して、ネパール出身のレヌカさんの目を通して世界を見るという体験をすることで、知らず知らずのうちに、自分の中にできている「思い込み」や「偏見」に気づく、という内容になっている。開発教育協会のウェブサイトには、地域に住む外国出身者にインタビューしたり相談したりしながら、その人のバージョンでのカードゲームを作成する応用編としての活用方法も紹介されている^[10]。

YAMAZAKI Mizuki

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科准教授
TIAN Hao

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科3年生

CHENG Yichen

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科3年生

3. 留学生と日本人学生の協同学習の試み

3.1 教材開発を目的とした協同学習の実施

2021年度後期の「異文化間コミュニケーション」で行った「レヌカの学び」が学生に好評だったこともあり、2022年度前期に東京都市大学メディア情報学部3年生のゼミで100分×3コマを使い、「レヌカの学び」の応用編を行った。ゼミは8名から構成されており、そのうち2名が中国からの留学生（日本での滞在期間はいずれも約5年）である。4名ずつの2班に分かれて、班ごとに3名の日本人学生が1名の留学生に話を聞く形で、「レヌカの学び」と同じような教材（カードと解説）を共に作成した。

第二、第三著者である留学生2名には事前に、「レヌカの学び」の資料を渡し、内容を説明し、自分にあてはめた場合、どのようなことがあると思うか、思いつくものをいくつ挙げてもらい、問題なく挙げられるか、誤解などがないかを確認した。また、日本や中国での経験や感じたこと／感じていることを他者に言うことになるため、こうした教材を作成することに抵抗がないかを尋ね、問題ないと承諾を得た。そのため、ゼミで実施する日までに、「中国にいるときの自分」「日本にいるときの自分」の内容について考えてほしいと依頼した。

ゼミでは、はじめに「レヌカの学び」について簡単に説明したが、日本人学生6名は前年度の「異文化間コミュニケーション」を履修しており、「レヌカの学び」の回にも参加して内容を理解していたため、展開はスムーズだった。当日は、色つきのA5用紙、マジックを用意し（各班には別の色の紙を配布）、各班に分かれて教材を作成した。日本人3名が留学生に話を聞き、聞き取ったことを記録するとともに、カードに書く文（「食事に招待されたら、ホストよりも遅く行くよ」など）を留学生と話し合って決めた。2コマ分をこの作業に使い、3コマ目では、出来上がったカードを班の間で交換し、他方の班が作成したカードを「中国にいるときの程さん（田さん）」のことなのか、「日本にいるときの程さん（田さん）」のことなのか、という視点で、班内で話し合いながらカードを分類し、その後、答え合わせと解説を留学生が行った。残りの時間で各班の留学生と日本人学生が話し合いながら、解説のための冊子を作成した。

3.2 完成した教材（カードと解説）

「程さんの学び」のカードは、「中国にいるときの程さん」11枚、「日本にいるときの程さん」11枚の計22枚、「田さんの学び」のカードは、「中国にいるときの田さん」10枚、「日本にいるときの田さん」10枚の計20枚が作成された。カードと解説の例を表1、表2に示す。

4. 作成した教材を用いた実践

4.1 社会人を対象とした「都市大留学生カフェ」における「程さんの学び・田さんの学び」の実施

東京都市大学横浜キャンパスでは、本学の留学生と地域の方々の相互理解を深める国際交流の場を提供する目的で2016年度より、地域連携担当の協力の下、「都市大留学生カフェ」を毎年2回程度実施している。2022年12月3日（土）にNPO法人ぐるっと緑道、中川西地区センターとの共催で開催し、横浜キャンパス近隣住民の方々、計13名が参加した。（新型コロナウイルス感染症流行により2020年度、2021年度は開催していなかった。）

(1) プログラムの内容

あらかじめ、2班に分かれて着席してもらった。教員（第一著者）による概要説明（10分）、本学の留学生である2名（第二、第三著者）の自己紹介（10分）の後、「程さんの学び」のカード22枚、「田さんの学び」のカード20枚の計42枚を各班に配布し、「中国にいるときの程さん（田さん）」のことなのか、「日本にいるときの程さん（田さん）」のことなのか、という視点でグループ内で話し合ってカードを分類してもらった（15分）。程さんのカードと田さんのカードは異なる色で作成されており、区別できるようになっていた。答え合わせと解説（25分）の後、2名の留学生がそれぞれ自己紹介と文化紹介、日本での体験などについての発表をパワーポイントを用いて行い（20分）、参加者からの質問に答えた（10分）。冒頭の概要説明では、中国の地図を用いて面積や人口、2人の出身地について簡単に説明した他、当日行う教育用ゲームは、開発教育協会発行のゲーム教材「レヌカの学び」の応用として、3年生のゼミで前期に作成したものである点、こうしたゲームを通して、2人の目を通して世界を見るという体験、2人が感じている中国と日本の文化の違いや日本での経験について知る機会としたい、といった本イベントのねらいを伝えた。

(2) 終了後の参加者による感想

参加者からは、以下のような感想を受け取った。「カードを使った留学生カフェは、非常に良かった。参加者も、中国の習慣・日本の習慣を考え、理解する事ができ、留学生の気持ちも理解できた。参加者と留学生間の関係が近くなり、また参加者同士の関係もできた。日本に魅力を感じてくれる学生を大事にしなければいけないと感じた」、「ゲーム形式で留学生の考えを参加者のみなさんと考えるのは面白く、時間が経つのがあっという間だった。留学生がどう感じているかのほか、日本で苦労していることもわかり、考えさせられることもあった。このようにお互いの文化を理解することで、距離が近くなっ

表1 「程さんの学び」のカードと解説（一部）

「食事に招待されたら、ホストよりも遅く行くよ」（中国） 食事に招待されたら、招待したホストよりも先に待ち合わせ場所に着いてはいけません。ホストより先に到着してしまうと、早く食べたいという意味合いに捉えられてしまうからです。むしろ、遅れることに関しては咎められてはいけないので、少し遅れて到着することがマナーです。	「食事に招待されたら、集合時間に遅れないように行くよ」（日本） 日本では遅刻することは失礼にあたるため、集合時間に遅れることは厳禁です。ホストより早く到着しても構わず、むしろ、遅刻しないために早く到着することはよいとされているため、程さんも遅れないよう気をつけています。
「できるだけ銀行に預金するよ」（中国） 中国の銀行では、高いところだと約5%の利子がつきます。例えば1年間に1000万円預金していたら50万円の利子がつきます。そのため、貯金をする人が多いです。	「銀行の預金に期待はしないよ」（日本） 日本の預金の金利は0.001%ではなく利子がつきません。日本では超低金利政策を行っており、利子は期待できないため、日本人は銀行にあまり貯金しないんじゃないかな、と程さんは思いました。
「知らないおじさんやおばさんが家にいることがあるよ」（中国） 友人を家に招くことは親切で友好的な行為と考えられています。そのため、中国ではよく知らない友達でも家に招待します。程さんの家でも、両親が知らないおじさんとおばさんをよく家に招待していたので、子どもの頃、程さんはとても悩んでいました。	「友達の家には遊びに行かないよ」（日本） 日本に来てから、程さんは日本の友達に家に招待されたことがありません。なぜ日本人は友達を家に招待しないのか。そのとき、程さんはとても不思議と感じました。日本人はとても仲のよい友達だけを家に招待すると日本の同級生が教えてくれました。
「課題の提出が遅れても、交渉次第だよ」（中国） 中国では、ルールはあまり重視されていません。ルールは変えられると思っています。あまりルールにこだわり過ぎると、硬い人、状況判断のできない人という印象を持たれやすいのです。ルールに囚われず、自身の意見や臨機応変な対応をする人の方が「人間的に立派である」と思われるのです。 もしあなたの要求がルール違反で拒否されても、諦めずに交渉してみてください。ルールが変更される可能性があるからです。	「課題を提出し忘れたら、受け取ってもらえないか、減点されちゃうよ」（日本） 日本では、時間やルールが非常に重視されます。ルール外のことであれば、交渉の余地はほとんどありません。みんなも自覚的にルールを守ります。程さんは、初めの頃、交渉の余地がないことに少し不満を持っていました。

ていくのだと改めて感じた」、「二人の目を通した両国の文化を知ることができ、大変面白かった。ワークショップ形式にしたことで、自分事として文化、習慣を見直し、知ることが出来た。同じ人間としての温かい交流ができたように思う」。

こうした感想は実施者への配慮から肯定的な方向で書かれている可能性はあるが、参加者たちの熱心な話し合いの様子や取組みを楽しんでいる様子から手応えを感じた。留学生が一方向的に発表するこれまでのスタイルからゲーム形式に変更したことによる点もあると思われるが、留学生の目を通して世界を見る体験をする魅力が「レヌカの学び」にはあるのではないかと考える。また、留学生が語る「文化の違い」は、その留学生から見た文化の違いや体験であり、中には誤解も含まれている可能性がある。そのため、個々の留学生によってカードの内容は異なり、そこから垣間見える世界も異なるため、国と国との違いだけに焦点を当てるのではなく、個々人の多様性を参加者は意識することができる。

4.2 大学生を対象とした「異文化間コミュニケーション」の授業での実施

(1) プログラムの内容

東京都市大学メディア情報学部の「異文化間コミュニケーション」の授業で2022年12月8日（木）に実施した。計45名が対面で参加した。当日の流れは都市大留学生カフェと同様である。5、6名ずつの班に分け、「程さんの学び」のカード22枚、「田さんの学び」のカード20枚の計42枚を各班に配布し、「中国にいるときの程さん（田

さん）」のことなのか、「日本にいるときの程さん（田さん）」のことなのか、という視点でグループ内で話し合ってカードを分類してもらった。答え合わせと解説、母國の文化や日本での体験についての留学生による発表、質問への回答がそれに続いた。ただし、時間の関係から、留学生による発表はかなり駆け足となった。参加人数が多いことから、手書きのカードでなく、Excelでカード文面を入力、印刷してトランプ程度の大きさに切り取ったカードを用意した。

学生は「レヌカの学び」と同様に、「グループの話し合いの中で印象に残った意見（分類するときにもめたカード、及び、もめた内容など）」、「全体を振り返っての感想」をワークシートに記述した。

(2) 分類でもめたカード

「班で分類するときにもめたカード（もめた内容）」として記述されていた内容を一部挙げると、「課題を提出し忘れたら、受け取ってもらえないか、減点されちゃうよ」について「ルール厳守のイメージがあるため日本だという人と、中国の方が勉強に対して厳しいイメージがあるため受け取ってもらえないのではないかという人がいた」、「友達の家には遊びに行かないよ」について「大学生であれば、友達の家に遊びに行くだろうという考え方と、中国では家におじいちゃん、おばあちゃんがいるために友達を呼べないのではないかと意見が対立した」、「よくパンや米を食べるよ」について「これは人の好みによるからよくわからない」「日本人でも麺を好んで食べるため、グループ内で意見が割れた」、「できるだけ銀行に

表2「田さんの学び」のカードと解説（一部）

「よく麺を食べるよ」（中国） 中国で、麺は小麦粉に限らず、穀物を粉末にして練った生地を指します。麺は、もとは小麦粉そのものの名称でもありました。日本のように生地を細く長く成形したもののだけを指すのではなく、餃子も麺です。中国の北方、特に華北地域では、麺をよく食べています。南方では日本のようにご飯を主食とすることが多いですが、他の種類の麺類もよく食べられています。	「よくパンや米を食べるよ」（日本） 日本では米とパンを食べることが多いです。たまに中国式の麺（餃子など）を食べますが、原料を手に入れるのが難しく、作るのも苦手なので、中国式の麺はあまり食べません。一人暮らしをしており、スーパーで調理済みの食品を買う方が好きなので、日本では米とパンを食べることが多いです。
「食事での会計は払うときと、払わないときがあるよ」（中国） 中国では友人同士で遊ぶ場合でも、食事などの会計の際は、誰かがまとめておごることが多いです。おごってもらった人は、次の機会におごる、というようにおごる人を回していくため、支払いをしないときもあります。	「食事での会計はみんなで同じ金額を払うよ」（日本） 日本では2人以上でまとめて会計をする際、基本的に割り勘をして、全員が同じ金額を支払うことが多いです。友人同士で遊ぶときはもちろん割り勘です。初めは割り勘をすることに冷たさを感じることもありましたが、日本で生活するうちに割り勘をする習慣に好感を持つようになりました。今では、おごりあいをすることで自分が下がってしまうことや、自分のお小遣いが少ないときにはおごることに抵抗を覚えることもあります。
「友達と大きな声でたくさん会話を楽しむよ」（中国） 田さんは話好きで、中国では友人がたくさんいて、誰でも好きになれました。友人とは色々な話をお互いに正直に話して、政治の話もよくします。他人の視線もあまり気になりません。	「少し恥ずかしがりやで、自分から友達をつくらないよ」（日本） 日本語の問題で、自分から友達を作らなくなりました。日常生活での日本語は問題ないのですが、若者の流行語がわからないときがあります（「ワロタ」、「ネタバレ」など）。 また日本にいるときは、他の人の迷惑にならないように、小さな声で話をします。相手の気持ちを考えて話すようになりました。日本語学校を卒業し、周りに日本人が増えてきたら、自分の行為が他の人にどう見えるか、変に思われないか、気になるようになりました。
「アルバイトはしたくないよ」（中国） 中国のアルバイトの時給は、200円程度です。これは、日本と比較するととても安いです。中国でアルバイトをしたとき、2時間で1000円でした。とても寒い日だったので、その稼いだお金で皆で火鍋を食べに行ったところ、会計が2000円で、せっかく頑張ってアルバイトをしたのに、お金が足りなかつたことが印象に残ったそうです。そのため、中国の高校生たちは、アルバイトをしてお金を稼ぐよりも、勉強に励んで知識を身に着け、よりよい仕事に就いた方が将来のためになるとを考えています。	「アルバイトするのもいいなと思うよ」（日本） 日本のアルバイトの平均時給は、三大都市圏（首都圏、東海、関西）で1,158円（2022年12月度調査、ジョブズリサーチセンター）です。これは、中国と比較するととても高いです。そのため、日本の高校生たちは、趣味や娯楽にお金を使うために、アルバイトと勉強の両立に励んでいるのだなと思います。田さんも洋服を売るお店でアルバイトをしてみました。

預金するよ」について「グループでは預金するのは日本と予想したが、結果は逆で、中国は利子が高いため、できるだけ預金するということだった」などの記述がみられた。

（3）終了後の参加者による感想

全体の感想としては、「政策等を見ると中国はいろいろ厳しいイメージがあった。しかし、男女間の仲の良さったり、『何でも交渉』という面だったり、思っていたよりも暖かい一面があることを知ることができた」、「自分は中国人留学生の知り合いがいますが、時々思っていた価値観の違いが全部カードに書かれていて、すっきりした。以前、中国人留学生2人と自分で食べに行ったのですが、気づいたら会計されていたので、そういうことだったんだなあと理解した」、「近くの国だから、あまり違いがないと思っていたが、かなり違うところが多かった。特にルールが厳しいのは中国と思っていたが、ゆるい事を聞いて驚いた」、「部活は本気か遊びかというカードが一番迷った。話を聞いて、『日本の部活は本気』というイメージは、漫画やアニメからの印象もあるんだと思った」、「答えが合っていても、その理由は違うということがあります、興味深かったです」など、それぞれの学生が多くの感想や気づきを書いており、関心を持って取り組め

ていたようだった。

5. 考察、及び今後の展望

（1）留学生と日本人学生の協同学習について

留学生と日本人学生を対象とした協同学習には様々な形態がありうる。第一筆者らはこれまでに、留学生1名と日本人学生1名がペアで横浜キャンパスの外国出身教員にインタビューし大学ウェブサイトに載せる教員の紹介記事を作成するプロジェクト^[1]、協同（相互依存）の要素を含めたゲームの考案とイベント実施^[7]、日中比較データを用いたアジア系留学生と日本人学生のディスカッション^[12]、日本人学生による留学生へのインタビュー調査、留学生と日本人学生が1対1で交流するチユーター制度の試験的導入^[13]などをを行い、集団間態度や異文化への意識がどう変化するかについて検討してきた。これらの中にはうまくいった部分もあるし、うまくいかなかった部分もあるが、全体としての課題の一つは、どうしたら日本人学生がアジア出身の留学生に関心を持つか、であった。英語で行う欧米出身者との活動に比べて、日本語で行うアジア出身者との活動は、日本人学生の関心を引き付けにくいという現実がある。欧米に比べて、アジアは相対的に日本と文化的距離が近いため、それほど楽しい驚きはないのではと学生たちは思いがち

である。また、中国語や韓国語を習っている学生でなければ、学んでいる語学を実践できるというメリットもない。そのため、上記のようなイベントをする際にも、全体として本学（横浜キャンパス）の場合、日本人学生の高揚感は低く、難しさを感じていた。

そのようななかで、「レヌカの学び」を用いた留学生と日本人学生の協同学習の試みは、今後の可能性を感じるものだった。この教材を作成するには、留学生の存在は不可欠であり、留学生が話す内容に耳を傾ける必要がある。作成中に何度も確認したいことが出てくるため、そのたびに留学生に質問し、留学生はそれに答え、また関連して思いつくことがあれば、情報を付け加えていく。一方、カードや解説の文章をわかりやすく、魅力的なものに作成するためには、日本語を母語とする日本人学生の存在が不可欠である。また、どのような内容について日本人が興味を持つのかを推測できるため、どのカードを残すといいのか、同じ内容でもどのように表現すると興味を持ってもらえるのか、を考えるという点でも日本人学生の存在は不可欠である。例えば、「よく麺を食べるよ」（中国）のカードの解説には、「餃子も麺です」という文が入っているが、これは初めから留学生が言っていたわけではない。日本人学生が「じゃあ、○○も麺？○○も麺？餃子は？」と質問していく中で、「餃子も麺に入る」ということが日本人にとっては楽しい驚きになることに気づいたという経緯がある。こうした小さな発見がコミュニケーションをとる中で得られ、魅力的な教材作成につながっていく。そのため、両者の間には協同学習に必要とされる「相互依存」の関係が明確に成立している。この協同学習の後、留学生と日本人学生の距離が縮まっているように見えた。

注意した方がよい点としては、「日本にいるときの○さん」について解説を書く際に、学生が日本の現状についてのみ記述する傾向のあることが挙げられる。例えば、「アルバイトするのもいいなと思うよ」（日本）のカードの解説として、「日本のアルバイトの平均時給は、三大都市圏（首都圏、東海、関西）で1,158円（2022年12月度調査^[14]）です。これは、中国と比較するととても高いです。そのため、日本の高校生たちは、趣味や娯楽にお金を使うために、アルバイトと勉強の両立に励んでいます。」のように書く傾向があり、この記述には、田さんの感情や体験は入っていない。だが、留学生の目を通して世界を見る体験をするためには、解説に、留学生がどのような体験をして、それに対してどのように感じているのか、考えているのか、が入っている必要がある。その記述によって、参加者は留学生に共感することができる。

留学生が語る「文化の違い」は、その留学生から見た文化の違いや体験であり、中には誤解も含まれている可

能性がある。誤解と思われる場合には話し合いのきっかけになり、留学生も新たな視点を得るチャンスになる。

（2）作成した教材を用いた実践について

社会人と大学生を対象に、「程さんの学び・田さんの学び」を実施した。反省点としては、留学生2名分のゲームを行ったため、使用したカードの数が多過ぎて解説に時間がかかった点である。90分程度のイベントで、答え合わせの後、留学生によるプレゼンも行う場合、計20枚程度（2名の場合は10枚ずつ）が望ましいだろう。

答え合わせと解説だけでも教育プログラムとして成立するが、情報が断片的になる可能性があるため、各カードの内容を改めて整理・統合するためにも、留学生によるプレゼンを設けた方が日本人学生の記憶に残るとともに、その留学生のことをもっと知りたいと思う気持ちに応えることができ、留学生への共感も高まるのではないかと考える。

大学生、社会人とも関心をもって取り組んでいたほか、少人数でも多人数でも行える点、今回は対面で行ったがZoom等のオンラインでも実施可能である点もこの教育プログラムの強みと言えるだろう。

本実践では、留学生と日本人学生の協同学習、作成した教材を用いた実践のいずれも客観的な効果の測定は行っていないため、今後はこれらについても検討していく必要があるだろう。

謝辞

都市大留学生カフェ開催にあたり、特定非営利法人ぐるっと縁道 塩入広中氏、中川西地区センター 赤木美得子氏には、多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 出入国在留管理庁（2022）令和4年6月末現在における在留外国人数について
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00028.html（2023年2月1日）
- [2] 日本学生支援機構（2022）2021（令和3）年度外国人留学生在籍状況調査結果
<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2021.html>（2023年2月28日）
- [3] Allport, G.W. (1954/1979) The nature of prejudice. New York: Doubleday Anchor Books. 原谷達夫・野村昭（訳）（1968）偏見の心理 培風館
- [4] Brown, R. (1995) Prejudice: Its social psychology, Oxford: Blackwell Publishers. (R・ブラウン：橋口捷久・黒川正流（編訳）（1999）

偏見の社会心理学 北大路書房)

- [5] Pettigrew, T. F., & Tropp, L. R. (2006) A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90 (5), 751-783.
- [6] 神谷順子・中川かず子 (2007) 異文化接触による相互の意識変容に関する研究——留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果, 北海学園大学学園論集, 134, 1-17.
- [7] 根本直弥・山崎瑞紀 (2011) 留学生と日本人学生の協同活動による集団間態度の変容 情報メディアセンタージャーナル (東京都市大学環境情報学部), 12, 35-38.
- [8] 西岡麻衣子 (2022) 「偏見につながる心理」の変容——集団間接触理論に基づいた異文化間協働学習を通して — 関西大学高等教育研究, 13, 1-11.
- [9] 土橋泰子 (2011) レヌカの学び——自分の中の異文化に出会う—— (新版) 開発教育協会
- [10] 開発教育協会 (DEAR) レヌカの学び——自分の中の異文化に出会う——
<https://www.dear.or.jp/books/book01/1373/>
- [11] 根本直弥・竹田稔史・山崎瑞紀 (2013) 留学生と日本人学生の交流促進のための教育プログラムの設計 情報メディアジャーナル (東京都市大学環境情報学部) 14, 34-37.
- [12] 星知美 (2010) 留学生と日本人学生の協働的活動とその効果, 東京都市大学環境情報学部 2009年度卒業論文,
- [13] 濱田龍之介・根本直弥・山崎瑞紀 (2012) 留学生と日本人学生のためのチーチャー制度の試験的導入とその効果 情報メディアジャーナル (東京都市大学環境情報学部), 13, 117-121.
- [14] ジョブズリサーチセンター 平均賃金レポート (アルバイト・パート)
https://jbrc.recruit.co.jp/data/data20230118_2538.html (2023年2月1日)